

図書館史研究会事務局

☺

藤野研究室

振替口座 京

——本号の主な内容——

- ・ 紹介： 川崎良孝著『図書館の歴史 アメリカ編』……山本順一
- ・ 第8回図書館史を考えるセミナー「緑蔭セミナー」について
- ・ 『図書館史研究』第7号の原稿募集
- ・ 機関誌発行の継続と会費に関する問題

紹介： 『図書館の歴史 アメリカ編』

川崎 良孝著

日本図書館協会 1989, 定価 1,800円

ここで取り上げる本は、その巻末の「学習者のために」のところにあるように、「アメリカ公立図書館の成立と発展を巨視的に概観」することを目的として書かれたもので、「図書館史全体を系統だてて理解できるよう」に「思い切った図式化を試み」とある通り、コンパクトななかに要領よくアメリカの公共図書館の歴史が語られている。

本書の内容・構成については後に検討することにして、図書館（情報）学研究における位置づけについてから、論ずることにしたい。この本は、小著ながら、著者のこれまでの20年余（だろうと思う）の図書館学研究者としての活動を中間報告的に集大成したもので、この分野ではすでに第一人者としての実績を誇る著者の研究プロセスのひとつの“里程碑”と見ることができる。著者が言うように、この本は「啓蒙書のスタイル」をとっているが、これまでの著者の成果をも含め、良くも悪くもわが国の現在のアメリカ図書館史研究の水準を示している。もっとも、この手の研究は、オリジナリティの働く余地がないとは言えないが、基本的にアメリカにおける斯界の研究成果の蓄積状況の制約を受けざるを得ない。ひるがえって、図書館（情報）学の理論体系を構想（夢想か？）しようとするとき、図書館の営む諸活動のすべてをひとしなみに眺めるところからは実りを期待し得

ず、他の社会的諸機関、サービス（公共的役務）と比較し、図書館に固有なものを見つめる中から独自の（学問的）理論体系が生まれいずるものとする。図書館史研究の意義は、それぞれの歴史的、社会経済的背景と図書館との具体的関係をとまじくすなから「図書館に固有なもの」を求めるところにあるとも考えられるように思える。本書は、図書館を語る際、そこに一定程度の「普遍性」をもつと考えられるアメリカの公共図書館について、初学者ばかりでなく、館界に身をおく人々にも何らかの見通しを与える意味で極めて有益な書と言えよう。（ちなみに、本会の設立当初にも見られたようであるが、実体がほぼ等価であるにもかかわらず、また理論上の「道具概念」としての有用性が十分に主張し得ない（と私が考える）にもかかわらず、“公立図書館”か“公共図書館”かといった無益な論争をするつもりはない。余計なことであるが、アメリカでは刑務所の経営まで民間が乗り出している（早川武夫『アメリカ法の最前線』日本評論社、1989, pp.59～64）。「公立」かどうかは公務員である当事者にとって意味をもつにすぎず、提供されるサービスの実質の優劣を問うべきものと思う。）

さて、話を本筋に戻そう。本書の構成については、「序論（目的と用語）」の終わりにあるように、フィラデルフィア図書館協会が成立した1731年、およびボストン公共図書館が開館した1854年を2つのターニング・ポイントとして捉え、①前近代の図書館史、②公立図書館前史、③公立図書館史の3つの時期にくくり、図式化をはかっている。（このことについては、アメリカ図書館史研究の“通説”であろうし、異論のあろうはずはない。もっとも、ボストン公共図書館設置のメルクマールを州法成立の1848年に求めることにも制度史的には意味があると思うし、ボストン公共図書館の影響力を勘案しての画期であるから、1850年頃としても問題はあまい。）

章だてもこの時期区分に対応している。「第1章 図書館における近代の成立」は、国教会の牧師、トマス・ブレイの教線拡大を目的とする図書館思想の検討の過程で教区民からそれを超えた市民への図書館開放の芽を見出し、次にその宗派的性格の対極にあるプラグマティックなフィラデルフィア図書館協会へと繋ぎ、その発足時の理事の構成、蔵書構成の検討等からそのソーシャル・ライブラリーとしての本質を明らかにする。そして、トマス・ブレイの思想のもつ宗派的偏狭性とフィラデルフィア図書館協会の思想的基盤がジョン・ロックの思想に通ずることなどから、両者に決定的相違がある旨を指摘し、そこに“図書館における近代”が成立する、と述べる。

「第2章 公立図書館前史」は、フィラデルフィア図書館協会以降のソーシャル・ライブラリーから、近代公共図書館への橋渡しの役割を果たした学校区図書

館への動きを叙述する。J・シュラのニューイングランドにおけるソーシャル・ライブラリーの分析と3期区分を紹介したうえで、ソーシャル・ライブラリーの利用者の嗜好に応えたフィクション重視の蔵書構成にふれる。そして、後に現実に近代公共図書館に糾合されていったものが少なくないソーシャル・ライブラリーのなかでも、とくに近代公共図書館と強い相関関係をもつ徒弟図書館、商事図書館、ならびに工場付設の図書館を事例に即して検討する。19世紀前半に各地に設置された学校区図書館については、ホレス・マンの教育思想と関係づけ、マサチューセッツ州での動きを紹介している。

ボストン公共図書館の設置を認めた最初の個別的図書館立法を行ったマサチューセッツ州は、ニューハンプシャー州に次いで一般的図書館立法を制定するが、その時の立役者の一人、ジョン・ワイトの所論から、「第3章 公立図書館の成立」を説きおこす。そして、ボストン公共図書館、ひいては近代公共図書館の思想的バックボンの形成に大きく寄与したエドワード・エヴァレットとジョージ・ティクナの公共図書館についての考え方を簡潔に紹介するとともに、社会的背景と絡め検討を加えている。

本書のおよそ半分を占める「第4章 公立図書館史」は、まず図書館界の成立を取り上げる。すなわち、1853年の図書館員大会を契機に次第に図書館の世界の形成に向かい、ALAの成立、『アメリカン・ライブラリー・ジャーナル』の発行開始、連邦教育局の『特別報告』、DCの公表その他歴史的事件の重なった1876年に至って各館が連帯した図書館界ができあがった。そして、メルヴィル・デュエイやアンドリュー・カーネギーの足跡を振り返る。さらに、ウィリアムソン報告に触発されて本格的図書館学の教育・研究が始まり、シカゴ大学大学院図書館学研究科で華々しい成果をみたことにふれる（ちなみに、最近シカゴ大学大学院図書館学研究科は募集停止の措置を余儀なくされている）。時代は第1次世界大戦から大恐慌、第2次世界大戦へと移り、政治経済的背景を織り込みつつ図書館サービスの進展を描いてゆく一方、知的自由の問題をも取り上げている。そして、戦後今日にいたるまでのアメリカ公共図書館の利用における実質的平等を目指しての動きと財政欠陥のもとでの図書館の現状にまで筆をのばし、アメリカ公共図書館の通史としてしあげている。

全体として、紙幅の制約のなかで「通説的見解」を軸によくまとめられているとの印象をもった。点をつなぐ歴史のような感じをいだくのは著者の力量のゆえでなく、これまでのこの分野における研究業績の蓄積が乏しいせいである。ただ、公共図書館の発展方向のひとつとして、戦後各地で見られるニューヨーク州の3Rシステムのような館種を超えた多館種図書館ネットワークの方向があることの

指摘はあってもよかったのではないだろうか。

これまでアメリカ法に素材を求め、行政法の勉強を断続的に続けてきたため、アメリカ図書館史をいまだに行政法各論の一分野、文化法として見ている私が、たまたま著者の川崎氏と研究関心の一つが近いという理由から、本書の紹介を引き受けたが、その任にふさわしかったかどうか問題なしとしない。しかし、ある大学の「図書館学特講」という科目を非常勤で担当しており、そこで本書を参考書として利用させて頂いていることとあわせ、さまでレベルを落とさずアメリカ公共図書館の通史を手頃なものにまとめていただいたことを「同学」の一人として感謝したい。そのうえで、著者にはさらに精進をお願いし、図書館（情報）学の体系化を含め、より大きな研究成果を期待したい。

（山本 順一）

第8回図書館史を考えるセミナー

「緑蔭セミナー」について

先にご案内いたしました、今年度のセミナーは、次のようなスケジュールで実施することになりました。

| | | | |
|---------|-------------|-------------|---------|
| 日程 | 9月1日（土） | 13:00- | 受付 |
| | | 13:30-19:00 | 研究発表・討論 |
| | | 19:00- | 懇親会 |
| 9月2日（日） | 9:00-12:00 | 研究発表・討論 | |
| | 13:00-16:00 | 総括討論 | |

場所 大東文化会館 ☎175 東京都板橋区徳丸2-4-21

東武東上線 東武練馬駅下車 徒歩3分

発表者とテーマ（当日の順序は入れ替わることになります）

| | |
|------|----------------------------|
| 清水正三 | 日本の図書館史について、最近調べていることなど |
| 石井敬三 | 大原文庫について |
| 奥泉和久 | 日清戦争後の地方青年会と図書館活動 |
| 加藤三郎 | 尾張藩校明倫堂文庫と読書活動（仮題） |
| 森 耕一 | 地方自治と図書館 |
| 山本順一 | アメリカ図書館制度史についての一考察（仮題） |
| 岡谷 大 | カールステットの歴史社会学の一考察 現象学の観点から |

河井弘志 啓蒙主義から歴史主義へ ドイツ図書館学の思想史的旋回

* そのほかテーマは未定ですが、石井 敦、是枝英子、宇治郷毅、油井澄子の各参加者が発表を予定しています。

参加者 上記12名の発表者のほかに、6名の会員が参加を予定しています。

† 当日申込みのご案内

会場設営の都合で、研究発表、懇親会参加、宿泊については、上記申込者をもって受付けを締めきらせていただきます。ただし、セミナーに自由参加されたい方は、当日会場において受付けますので、1日だけでも結構、遠慮なくお越しください。

— 原稿を募集します —

『図書館史研究』第7号の原稿を募集します。テーマはいっさい限定しません。

応募；原稿の送り先は下記のとおり。

10月末までに。

宇治郷 毅 宛

注意：400字で30枚程度（できればフロッピーディスクで）。採否については、編集委員会が検討します。

事務局より

† 機関誌刊行との関係による会費の見直しについて

5月30日に運営委員会が開かれ、①緑陰セミナーの件 と ②本会機関誌『図書館史研究』の刊行継続 について討議をいたしました。

その席上、②に関し様々な角度から検討しました結果、本会の負担のもとに完全版下を作成し、それを出版社に引き渡し、販売のリスクを出版社に負わせ

るという形での刊行継続には双方に難点がある。来年度から、会員を2種に分け、(a)機関誌購入予約会員〔実費(1,000円)を上乗せし、会費2,000円〕、(b)機関誌非講読会員〔従来通り会費1,000円〕としようかとの案が有力となっています。会員各位のご意見をお聞かせください。(宛先:本会事務局)

〒

✦ ニュースレターの原稿募集

テーマ、分量は問いません。図書館史についての原稿をお寄せください。

✦ 本年度会費未納の方へ

封筒の表面、宛名の紙片に「90」と印刷されていない方は、本年度会費1,000円が未納です。(不明分3名、貯金局からの通知待ちで、その分はご容赦下さい)

おはやくご納入願います。